

日本文学全集 45



安岡章太郎

海辺の光景他

吉行淳之介

砂の上の植物群他



河出書房

日本文学全集 45 安岡章太郎
吉行淳之介



© 1974

責任編集

武者小路実篤 川端康成
石坂洋次郎 山本健吉
瀬沼茂樹

昭和45年8月30日 初版発行
昭和58年3月10日 4版発行

著者 安岡章太郎
吉行淳之介
発行 清水勝
印刷 和田彰三
装幀 原弘

印刷 東洋印刷株式会社
製本 中央精版印刷株式会社

発行所 東京都渋谷区千駄ヶ谷2-32-2 株式会社 河出書房新社

電話東京 404-1201 (営業)
404-8611 (編集)
振替口座 東京 0-10802

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

定価は帯にあります

Printed in Japan

目次

安岡章太郎

海辺の光景

舌出し天使

ガラスの靴

悪い仲間

吉行淳之介

砂の上の植物群

焰の中

年譜

文学入門

作家の横顔

五

九

一九

一八五

二〇九

三九

四三

四七

四七

四七

進藤純孝

坂上弘

吉行理恵

四七

四七

四七

安岡章太郎

海
辺
の
光
景

片側の窓に、高知湾の海がナマリ色に光っている。小型タクシーの中は蒸し風呂の暑さだ。棧橋を過ぎると、石灰工場の白い粉が風に巻き上げられて、フロント・グラスの前を幕を引いたようにとおりすぎた。

信太郎は、となりの席の父親、信吉の顔を窺った。日焼けした頸を前にのぼし、助手席の背に手をかけて、こめかみに黒味がかった斑点をにじませながら、じっと正面を向いた頬に、まるでうす笑いをうかべたようなシワがよっている。一年ぶりに見る顔だが、喉ぼとけに一本、もみあげの下に二本、剃り忘れたヒゲが一センチほどの長さにのびている。大きな頭部にくらべてひどく小さな眼は、ニカワのような黄色みをおびて、不運な男にふさわしく力のない光をはなっていた。

「で、どうなんです、具合は」

「電報は何と打ったんだかな、キトクか？……今晚すぐというほどでもないようだな、まあ、時間の問題にはちがいないが」

信吉は口の端に白く唾液のあとをのこしながら、ゆつくりと牛が草を噛むような調子でこたえた。

「ほう」

信太郎は、父親が話し出すと事務的なこたえ方になった。窓をひろく開けたが、夕なぎの海面から吹きこんでくる風は熱気をおびて、車内の温度には影響がなさそうだ。汗にまみれた手頸にまつわりついてくるシャツの袖をたくし上げながら、乾いた肌着にとり換えるときの心持を何度でもくりかえして憶い出そうとしていた。……突然、腐った魚のハラワタの煮える臭いが鼻を撲った。車のすぐ前をケタタマしい叫びを上げて、トサカまで真白くほこりを浴びたニワトリが何羽も横切った。粗末な、板片を打ちつけただけの家が、倒れそうになりながら軒をくつつけあつて立っている。「部落民」と呼ばれる人たちの居住区だ。この部落がつかると、道路は平坦になり、やがて二た股になって別れる。

——来た、と信太郎はおもった。

一年まえ、運転手がラジオにスイッチを入れたのは、ちようどこのあたりだった。古い大型の車で、運転手のとなりに信太郎が、うしろの座席に父親と伯母とが両側から母をはさんで坐っていた。後部のトランクに夜具が一と揃い収めこまれてある……。波長のととのわないラジオは部落をとおりこすと同時に、高く鳴り出した。漫

才をやっていた。どっと起った笑い声の中から、女のカナキリ声が聞えた。とめてくれ、信太郎は云いつけようとしたが、口をひらきかけたまま言葉が出なかった。運転手は黒い皮の手袋をはめた手を得意そうに上げると、いきおいをつけるようにハンドルを切った。細い路地の両側に茶店の赤い小旗が目についた。狼狽して信太郎は云った。

「ちがうんだ、この路じゃなかった」

「……………」

運転手はブレエキを踏みながら、不服そうにサン・グラスの眼を向けた。うしろから伯母と父とが体をのり出した。バック・ミラーに小さく母親の顔がうつった。笑っている顔だった。漫才の女のうたいだした流行歌にあわせて、自分もいっしょに口ずさんでいる。

「K浜ですらう、K浜なら……………」

運転手の声はイラだたしげに、車の中じゅう響きわたった。父親が何か云いそうになった。信太郎は、父親ののりだした姿勢を抑えるために声をはり上げた。

「ちがうんだ。……………K浜のちかくなんだが、すこし手前をまがるんだ」

車のまわりに人がよってきた。茶店のとなりで、軒先に吊るされた青や赤の水着がゆれた。運転手は舌打ちした。

「K浜へ行くというから、K浜かとおもうたに……………。曲るのはどっち？ 右、左？」

「左だ。しかし、どっちにしても、すこしバックしてもらわないと……………」

「バック？ バックして一体どこへ行くつもりですぞ」
どこへ行くつもり、信太郎は心の中でつぶやきかえした。なぜそれが云えないのか、理由はハッキリしているはずだった。行先を母親に知らせるわけにはいかないからだ。しかし、それだけだろうか。もし理由がそれだけだとしたら、なぜ前の晩、この車をたのみに行ったときの用意でもしておかなかったのか。自動車は運転手の不機嫌をそのままあらわすように、エンジンの音を鳴らしつづけた。車のまわりの人だかりは、ますます増えてくるばかりだ。彼等は避暑客だった。だから水死人をのぞきこむように、この立往生した車の中のをぞいてみたいのだ。これ以上、車を止めておくわけには行かない。信太郎は運転手の耳もとにささやくように云った。

「永楽園、わかる？ あそこへちよつと用があるんだ」
「エイラクエン？」

運転手は、まるでわざとのような大声で問いかえした。車のまわりで、ざわめきが起った。運転手はラジオを止めると、ゆっくり信太郎の方をふり向いた。そし

て、殊更のような大阪弁になりながら、「ははア、これでっか」と、自分の頭を指した手を空で二三度振りまわすと、乱暴にハンドルを廻して、逆の方向にカーヴを切りなおした。信太郎は、いままで自分の抑えつけられていた不安が、突然、何者に対してともない怒りのようなものに変つて行くのを感じた。

それから一年たったいま、それが何であつたか信太郎は憶い出すことができない。ことによると、それは外へ向つた怒りではなくて単なる狼狽であつたかもしれない。どっちにしても、あの小さな事件のおかげで、自分のやつてゐることをまるで絵にかいたようにハッキリと眼のまえに見せつけられたことはたしかだつた。あのとき彼は母親に、「これからいっしょに東京へ行こう」と云つておいた。東京へかえろう。しかし、そのまえにK浜で伯母さんたちと一日ゆっくり遊んで行こう、ということになつていたので。土間につづいた茶の間のうす暗い電燈の下でそう云うと、母親はにわかになんか元気づいて、急に土間の上り口の踏み板を雑巾で拭いたりしはじめた……。

タクシーは上り坂にかかつていた。このあたりはもう病院の敷地だ。斜面の路の両側に桜の並木がある。

「季節になると、市内からこの桜を見にくる人が大勢お

りますよ」

はじめてこの病院を下見分の意味でたずねたとき、看護人の青年がそう云つたのを憶い出した。たしかにそれは美事なものだつた。満開のときは斜面全体が桜の花に包まれるにちがいない。けれどもここが花見の場所として賑わうとは考えられなかつた。あまりに整いすぎてお花見にふさわしい乱雑さに欠けていた。看護人の言葉に反えて信太郎は、満開のまま深閑とせずまりかえつた花ざかりの桜の森を思ひうかべた。すると樹液をしたたらせた艶のある桜の幹の一本一本が、見えない「狂気」を大地から吸いとつては、淡紅色の花のかたちにして吐き出しているようにおもわれてくるのだつた。斜面の中腹から道はまた二つに分れて、

永楽園女子病棟

として、左向きに矢印をつけた立札が見える。車は一気に坂を上りつめた。と急に視野がひらけて眼の下に、小さな入江と、それをU字型にかこむ平地と、白い真新しいコンクリート造りの建物とが、たそがれどきの薄暗やみの空気の下から、まるでチョコレート化粧箱の色刷の絵のような風景をのぞかせた。病舎なのである。

「どうです。奇麗でしょう。なに、病院としての設備は、やっぱり地方だけにいくら時代おくれですがね。脳外科の手術なんかめつたにやりませんし……。で

も、こうやってみると病棟はじつに奇麗でしょう」

斜面の桜の自慢をした青年が、やはりはじめてきたときの信太郎に云った。桜並木に花見の客がやってくるということには、何かうなずけないものを感じた信太郎も、この「奇麗でしょう」という言葉はそのまま受け入れた。まったくのところ、その絵のような景色は美しいということに何の説明も要しないものだったふうだ。けれども、あとになって考えると青年の云ったのは、病舎そのものが衛生的で掃除が行きとどいているという意味にもうけとれた。たしかに、そういう点でも信太郎の見てきた東京近郊の病院とくらべて、ここは奇麗にちがひなかつた。タクシーは崖のように切り立った斜面の、まがりくねった坂道用心ぶかく下って行つた。

病棟玄関には、すでに燈がともっていた。車寄せのすぐまえに湖水のように静かな海がひろがって、まだそここに日は暮れのこつていたが、時刻はもはや消燈時を過ぎて患者の姿は見えなかつた。

「ひとつ、様子を見てくるか?」

信吉は片頬にうす笑いのようなものをのこしたまま、息子の顔を見上げながら云った。

「行きましよう」

信太郎はイラ立たしげにこたえた。——危篤の母を見

舞いにきた息子なのだから、それが当りまえではないか。——しかし、燈の消えた長い廊下を懐中電燈をもつた看護人に案内されて行くうちに、ふと自分の姿がひどく芝居じみたものに思われてきた。自分のはたして母に会いたいのか、会いたくないのか? すでに正常の意識を失っているもののそばへ行つてやることに、どれだけの意味があるのだろうか? このようにして急ぎ足に歩くことは、単に息子としてふさわしい行動をとらなければならぬと思つてゐるためではないのか。

「あ、こつちです」

案内の男は懐中電燈を振つて云つた。信太郎は、反対側の階段へ足を向けようとして、裏返しになつたスリッパをはきなおしながら立ち止つた。

「こつちの方へ移しましたから……」

男は、事務的な、抗弁するような口調で云うと、先に立つて歩き出した。入院させるときは、明るい海べりの部屋をたのんであつた。一体いつから部屋をかえられたのか? しかし、いまさらそんなことを聞き出してみることは無駄におもえた。鉄の扉があつた。暗闇の中から、饅えたような甘い臭いがただよひはじめた。重症患者のための個室が廊下の両側に並んでいる。どの窓にも頑丈な鉄格子と太い金網が張られ、小窓の一つ一つに沈黙が音になつて聞える気がした。一步あるくたび

に動物的な恐怖がやってくる。案内者の懐中電燈が気まぐれに左右にふられると、金網にびったり寄せた顔がうかび上り、光った眼が吸いつくようにこちらを見てゐる。左側に一つだけ、半開きになった扉があつた。

「ここです」

案内した看護人はカカトを踏みつぶした運動靴の足を止めた。一枚だけ畳を敷いた板貼りの部屋に、うすい藁蒲団と蒲団をかさねて母は寝かされていた。

「浜口さん、どうぞね（どうぞだね）？」

枕もとにかがみこむと、看護人はびっくりするほど大きな声で云つた。外側の窓から月光が矩形になつて流れ落ちてゐる。懐中電燈に照らし出された母の顔は、すっかり痩せおちてゐるうえに、醜くゆがんで、ほとんどどこにもとの面影はなかつた。看護人は電燈を一層まぢかに近よせると、眼蓋を指でみひらかせた。灰色の腫が一点を凝視したように動かなかつた。

「浜口さん、浜口チカさんよ。東京から息子さんが来たぞね。あなたが、びっしり（しよっちゅう）云いよつた息子さんぞね」

耳もとで、どなるように云うと、看護人は信太郎に眼を向けた。扱いなれた動物を、見物人のまえでいろいろ動かして、値ぶみをさせる商人の顔にみえた。

「あなたが何か話してやつてごらんさい。ひよつとす

ると気がつくかもしれせんよ」

男の、なかな職業的な声に、信太郎は命令されたように、その顔を母のそばに近づけた。汗と体臭と分泌物の腐敗したような臭いが刺すように鼻についた。しかし、その臭いを嗅ぐと、なぜか彼は安堵した気持になつた。重い、甘酸っぱい、熱をもつたその臭いが、胸の底までしみこんでくるにつれて、自分の内部と周囲の外側のものとのバランスがとれてくるようだった。いまは変型した母の容貌のなかに、まちがいはなく以前の彼女のおもだちが感じられる。いつまでも子供っぽい印象をあたえていた額は渋茶色に変わつて深い縦皺がぎざまれ、ゴム鞄のようにふくらんでいた頬は内側からすっかりえぐりとられたように凹んで、前歯一本だけをのこして義歯をはずされた口はくろぐろとホラ穴のようにひらかれたままだ。それに、あんなに肥つて、みにくいほど二重三重になつていた頤の肉は嘘のように消えて、頤がそのままシワだらけの喉にくっつきそうになつてゐる。けれども、いまは次第にそれらのものが、それぞれに昔からなじんだ部分部分のなごりを憶い出させてくれる……。だがそれだからといって、この母に何か話しかけてみる気にはなれなかつた。というより母であることを感じれば感じるだけ、口をひらこうとするとギョチなくなつてしまふのだ。

すると男は、もはやあからさまにイラ立って、
 「浜口さんよ。息子さんぞね……。わからんかね、息子が来ちよるぞね」と、母親の耳もとでドナリつけ、頭をふりながら、ことさらのように失望の表情を示すと、
 「しようがない、どうしてこうわからんのじゃろう」

とつぶやいて、こんどは母の両手を取ると、はげしく上下に振りはじめた。母親の袖口から、ほとんど骨のままでのような腕があらわれた。

「いいんですよ……」と、信太郎はなぜともなしに笑いながら声をかけた。

「いいんですよ、このまましずかに眠らせてやってください」

実際、信太郎は、自分がどうして笑うのかわからなかった。四十度ちかく発熱して、この数十時間、昏睡状態をつづけたままでいるはずの母は、耳もとで声をハリ上げられたり、体をゆすぶられたりしたために、ますます困憊して行くらしく、崩れたぼろ布のように横たわったまま、あらあらしく胸を波打たせていた。……こんなとき笑うのは多分、不謹慎なことだろう。そして自分でも、おかしがる心持はすこしもないのに、気がつくつと、どういふわけか頬のあたりがほほえむようにムズがゆくなってくるのだ。これは一体どうしたことだ？

信太郎は口をむすびなおした。しかし心に何か落ちつ

かないものがのこった。彼は習慣的にタバコをくわえながら、病室内の喫煙が禁じられていることを憶い出した。だが、くわえたタバコをポケットにもどすのも面倒だった。

「どうですか、ひとつ」

思いついたように彼は、男にタバコの箱をさし出した。

「はア」

男は短くこたえると、小走りに部屋を出て行ったが、もどってきたときには灰皿の代用になる糊の空ビンを手にしていた。男のあとから父親の信吉が顔を出した。

信太郎は、あらためて男に向いあいながらマッチを擦った。マッチの火に浮び上った男の顔をうかがうと、頬の白さで意外なほど若い——ことによると未成年者ではないかとおもわれるほど——ことがわかった。三人が一本のマッチで火をつけるために頭をよせ合うと、その瞬間、この病棟全体にみなぎっている異様な沈黙が、まわりからひたひたと押しよせてくるのが感じられた。

信太郎は、タバコをのんでいる父親の顔がきらいだった。太い指先につまみあげたシガレットを、とがった唇の先にくわえると、まるで窒息しそうな魚のように、エラ骨から喉仏までぐびぐびとうごかしながら、最初の一

ぶくをひどく忙しげに吸いこむのだ。いったん煙のみこむと、そいつが体内のすみずみにまで行きわたるのを待つように、じつと半眼を中空にはなっている……。吸いなれた者にとつては、誰だつてタバコは吸いたいものにきまつている。けれども父の吸い方は、まったく身も世もないという感じで、吸っている間は話しかけられても返辞もできないほどなのだ。

——この病院でも、患者たちは何よりもタバコに餓えている。だから看護事務室や医務室の灰皿は、いつ見ても洗ったばかりのように奇麗だ。ちよつとの隙を見すまして、誰かが吸いさしを拾って行くからだ。タバコだけ手に入れても、患者たちはマツチが渡されていないが、彼等は丹念に石を擦り合せたり、天井に上つて電線をシヨートさせたりして火を点ける。「まったくのところ、患者というやつは常人の及ばんことを考えつきますからね、われわれはもう油断もスキも出来んですよ」

若い看護人のそんな話をきくともなしに聞きながら、信太郎は父母といつしよに暮した鶴沼海岸の家のことを憶い出していた。終戦の翌年だった。父は階級章を剥ぎ取った軍服に、革製のふしぎな型のリュックサックを背負った姿で、南方から送還されてくると、屋敷の一隅で捕虜収容所の生活をはじめた。庭じゆうを掘りかえして、麦やヒエや雑多な植物をうえながら、門の外へは一

歩も出ず、ひたすら外界との接触を怖れていた。収容所の中で縫装兵につくらせたというリュックサックには、洗面器と兼用になる食器だの、星型にひろがる蚊帳だのと、奇妙なものが収めこまれていたが、それらはすべて父親にとつてタカラモノだった。一日に何度となく、その中を覗きこんでは仔細げに一つ一つ取り出して眺め、あらためてまた長い時間をかけて収めなおす。それがおわると、手製の水牛の角のシガレット・ホルダーに飯盒から取り出した「ほまれ」を差しこんで、惜しそりに少しずつカビ臭いけむりを吐き出すのだ。

手垢に汚れた竹の筒も宝物の一部だった。黒いゴマ粒大のものが入っていた。香辛料とタバコの種子だという。それは庭の畑にまかれると、ちよつど飯盒の中の「ほまれ」がつきるころ、真青な葉をしげらせた。父はその葉を二三枚ずつ摘みとると、縁側に並べて日に乾し、かわいたところを見はからつて、パイプにつめては、れいによつて惜しそうに一ぶくずつ胸の奥まで吸いこんで夢見ごこちに半眼を閉じた。ところが、それから二三日たつと、父は日に焼けた額に蒼黒い汗をうかべて寝込んだ。それまでは人一倍旺盛だった食欲もなくなり、二三時間おきに嘔吐した。母は医者を呼ぶために、なけなしの衣料を何点か売り払った。無収入の一家にとつて、それは今後何週間か生きのびられるだけの食費に

あたる金額だったが、吐瀉物のなかに焦茶色の血液に似たものが交っているので、放ってはおけなかつた。……やってきた医者には診断がつかず、結局一週間ほどのちに病人はひとりで回復したが、あとになって病氣の原因が自家製タバコの吸いすぎであつたことがわかつたときには、安心するよりも腹立たしくさらに、滑稽でもあつた。

「どうです、そろそろ休まんと、体がエラいでしよう」
タバコを切り上げた看護人が云つた。先刻にくらべると、その口ぶりに親切さが感じられた。しかし、病棟の外に別の部屋が用意してあるからと云われても、信太郎は体をうごかす気になれなかつたので、そうこたえた。すると、看護人はまた少し身がまえる様子になつた。
「このぶんなら、今晚は大丈夫ですよ。何かあつたら、すぐ知らせます。……東京から真直ぐこられたのなら、つかれなさつたでしよう」と、その語調はねぎらうよりは、強制的に迫り立てようとするひびきがあつた。

「迷惑でしょうか。僕はちつとも眠くはないんですが」
眠くないのは本当だつた。しかし、それよりも立ち上ることの方がもつと面倒だつた。

「迷惑なことはありません」

看護人はこたえながら、懐中電燈をもう一度、母の顔

に向けてと、枕もとにしゃがみこんで、しばらく考えこむそぶりをした。その様子から、たしかに彼が迷惑してゐることがわかつた。

「外から、鍵はかけるんでしようか？」

信太郎は、I市の精神病院に友人の妻君を見舞に行つたときのことを憶い出しながら訊いた。看護人はまとも

に答えた。

「いいえ、浜口さんの部屋には、もう鍵はかけません」
蚊のうなる声が耳もとで聞えた。蚊やり線香を持つてきてもらえないものだろうかと訊こうと思つた。しかしタバコが禁止されているのなら、蚊やりも止められてゐるにちがいないと思ひなおして、それはやめた。看護人は懐中電燈を片手に部屋の戸口に立つたまま、信太郎を無言で眺め下ろした。信太郎は壁に背をもたせ、床板に尻をついたままで云つた。

「いいですよ、今晚はぼくがここで見ていますから、あなたは自分の部屋で眠つた方がいい」
「……………」

看護人は何か云いたそうに唇をうごかしかけたが、途中からムツとしたように口を閉じた。廊下の螢光燈に顔の半面だけが青くてらされている。信太郎は、はじめて自分の云つたことが、何かで看護人の心を傷つけたらしいと気がついた。——けれども、いったい何がイケな